

所謂純文藝にうつて来ることは當然の結果である。  
それは一つの政治的段階——明治維新の社会的、政治的、變革を経過し、全盛期の資本主義擁護の爲めに産れたものであるが故に資本主義の全盛時代に這入れば文學は當然それより離れて来るものである。  
岡澤秀虎氏も「或る一つの階級文化が既に政治的段階を経過し、而もその支配階級のイデオロギイが統一的心理として擴がつてゐる時代には藝術は決して直接政治的範圍に役立たうとしない。物質的文化に寄與することを自己の直接の目的として意識しない。その時代には藝術は専ら精神的的文化に寄與することによつて人類に役立つのである」(新潮七月號)にかなりシッカリした論文を發表してゐる。

こうして政治的文學は資本主義統制下に統一された社會に於ては、又ブルジョアイデオロギイに依つて支配されてゐる社會に於ては何等重要なき政治的範圍には交渉をもつ必要はなくなり、否、反つて統制下に壓せられてゐるが故に、必然的に精神文化に寄與する文學として働かざるを得ない。  
この當時の作者は坪内逍遙、尾崎紅葉、高山樗牛等、かなり堅實な作者も見えてゐるが、その時代の文學は、懷疑的なセンチメンタルな人生の描寫の傾向をもつて、外國物としてはトルストイ、イブセン、ツルグネーフ等がかなり陶酔せられたやうである。

更に社會的情勢は進展をして明治の末期より大正の初期に至るに資本主義制度の破綻の兆が現はれ、社會的不安が感ぜられる時代に這入つて来た。そしてその濃度が益々加はるに従つて無思想が勃興し、田山花袋、島崎藤村等に依つて無主義文學が擡頭したのである。然しながらこうしたロマンチズムな文學は長続きはしなかつた。社會的不安におびやかされた民衆のイデオロギイは何物かこれに對する堅實な打開方面を要求したのである。それが島村抱月等に依つて紹介せられた自然主義文學である。これは今までの空想的、理想的、精神的な文學を破り、科學を基礎としたしつかりした文學の樹立の要求から起つたもので勿論科學を基礎とする以上、その手法は現實的、機械觀的に、云ひかへれば客觀的にありのまゝを描寫する云つた方法である。然しその生温い自然主義も資本主義の崩壊を前提とした時代に來たつてはさうするに出来なくなつたのである。

大正の末期に於ける重工業の發達と共に資本主義の發達は其の極度に達し、資本は益々集中されて小工業の破綻と共に失業者の群は續出し國際的經濟戰爭の失墜等は民衆をして益々不安と混迷の中へ陥し入れたのである。この時代に於ける既成文壇に現はれたる現象はさうであつたか？それは無氣力な、頹廢的な未精神の鋭い、青白い魂の不完全な社會意識、病感的感覺である。こゝに於て起る文學は、勿論單なる享樂的な、デカダン的な文學であつた。而してなほ資本主義制度は益々獨專集中化されて中央集權的になつて來るに地方農村的疲弊を來し、地方の民衆は自然に都會を憧憬の中心とする。これ即ち都會中心主義文學の時代である。然しながらこの社會制度は益々不安の極度に達すればその安定的なイデオロギイが益々破壞されて來る。こゝに始めて社會の新しい質的變化が起ることは必然である。所謂ブルジョアイデオロギイが崩壊し、プロレタリアイデオロギイに變遷され、こゝに擡頭したのがプロレタリア文學である。

かくして其後間もなく文藝戰線派とプロレタリア藝術派とが對陣してプロレタリア文藝理論の育成と清算とに關して大きな貢獻をなし、益々この偉大な力は全プロレタリアートと共に對立闘争に向つて彼等陣營を築かしてゐるのである。誰か、人類は唯物辯證法に依つてのみ正しき認識、眞の理智への文化へ導き出されることを否定することが出来るであらうか？

そこで現在の文壇ではさうであるか云ふに、それは新しく擡頭した無階級文學と舊制度にさらはれて溺れんじながらも焦燥してゐる自然主義文學の憂鬱な存在である。而してこの新しい階級文學がプロレタリアートの要望を把握しつゝ、目ざましい發展をなしてゐるのであるが然らばその政治的に動きかけてゐる文學としての藝術的價值に就いてさうであるか云へば、藝術は人間の社會生活の所産であるが故に階級戦線に向つて民衆をして正しき認識に導く科學的な政治的の目的意識をもつたものであるから藝術的價值を少し失ふものではないのである。只藝術はその社會に於ける大多數の人々の感情感覺を反映するものであるから社會的情勢が唯物辯證法的發展をなして行く過程に於て藝術現象、政治現象とが相對的に密着するものであつて藝術として露骨なる政治的觀念の表現は勿論辯證法的見方でもなく又藝術的價值を損ふことは否定出来ないのである。

現在に於てはこの辯證法的發展に目的を置いて主流と舊文藝學者流たる菊池寛久米正雄氏等のひきよめる新技巧派である(か)更にそれから演進された女人藝術等も生れた(か)最も新しきをつかまへてゐる横光利一、中河川端、池谷、犬養氏の新感覺派の變形形式主義文學など云ふ分派が瀾漫して民衆をデマゴグしてゐるのであるが、新しく來たる社會と共に進展する新興文學の前に、日一日して滅び行くそのあはれなる姿を見る時實に感慨の念にたへないのである。(五九元ハセ)

# 地方プロレタリア文藝雜誌の任務に就いて

岡本哲哉

最近、群馬縣内各地に於てプロレタリア文藝雜誌の發刊が計畫されてゐる。既に實現したのも二三あるが、此の際地方プロレタリア文藝雜誌は如何なる任務を果たすべきに就いて述べるのは、可成り重要なことに屬する。  
次ぎにある諸點は、地方プロレタリア文藝雜誌の運動の基準となすべきものであるが、素よりその正否は、今後各雜誌の運動の経験に依つて決定されるものであると共に、多くの修正、補正が要求せらるべきものたるは云ふを俟たない。

一、戦線や文藝戦線の縮小であつてはならぬ。  
先づ吾々は、運動の効果を問題にしなければならぬ。地方プロレタリア文藝雜誌が文藝や戦線の縮小であつた場合に如何なる効果をあげ得るか？ 當に見ずばしさを曝け出すばかりではなく、如何なる對象の下に運動すべきか？ 皆目見當がつかない。中央の雜誌を手にしてゐるものは、今更そんなものを必要としない、その内容が、直接或る特定の未組織大衆の生活でも取扱つてゐない限り文藝や戦線と同様その持込みが困難であり、結局極く少數の大衆から遊離した文學愛好者の遊戯に墮するより外にない。

二、その地方の特殊な状況に適合すること。  
中央の雜誌の縮小であつてはならぬとすれば、地方プロレタリア文藝雜誌は、その地方の特殊な状況に適合して運動するより外にないことが明かだ。特殊な状況は何んなことか？ 例へば群馬縣地方にあつては製糸工場地帯、織物工場地帯と云つたやうなものである。此の地帯のプロレタリアの状況にピッタリ合致した文學を以て活動しなければならぬ。併し乍ら若し製糸工場内や織物工場内に従業員同志の雜誌のある場合には、あらゆる機會を狙つて、その雜誌に同志が接觸しその中で働くと同時に吾々の雜誌の影響下にそれを置くべく努めることが必要だ。

三、組織運動と密着してゐること。  
文藝運動が組織運動と密着しこれと共に進まねばならぬことは論を俟たないが、特に地方プロレタリア文藝雜誌は、組織運動者の樹立した目的工場に全力を集中し、その組織の直接の協力者たるのみならず、大衆の不平不満の激發のために運動の先端を行かなければならぬ。こゝで問題となるのは此の場合に於ける文藝雜誌とアヂビラの關係である。此の場合雜誌がアヂビラの任務をも兼ねるやうになる傾きがないが、それは別に差支ないと思ふ、唯、雜誌はアヂビラの日給制度を確立しろ！

公休日全額支給！  
等々の如く端的でなく、出来るだけ何故に日給制度が必要か、公休日全額支給は何故に正しい要求であるかを平易に詳細に労働者の生活を通じて宣傳すべきである。自然發生的な不平不満を出来るだけ吸集してこれを激發し目的意識にまで高める事の重要なのは今更具體説するまでもない。

四、極めて平易であること。  
こゝすれば、文學青年の持つペンチツクな自分自身にさへ、よくその意味を呑み込めないやうな難解な文章の並列や直譯流な手法は絶対に避くべきである。あくまで平易であるべきだ。如何に平易であらうとも、それは絶対に藝術の品位の低下でもなければ、作者の墮落でもない。

五、意識的に生長した大衆をその影響下にないておいてはならぬ。  
自然發生的な不平不満が意識的になつた時は、最早、地方プロレタリア文藝雜誌としての當面の目的とした任務が終つた時であつて、更に別の新たな大衆へ働きかけることを要する。意識の生長した大衆をその影響下に束縛することは出来ぬ。又大衆はもつと程度の高くない雜誌を要求すべきが當然だ。地方プロレタリア文藝雜誌は組織運動の必要に應じて更に特殊な部門に活動すべきである。

六、臨時増刊の必要。  
組織運動と完全に密着連絡せねばならぬ以上、月一回の限定出版では容易にその任務を果たし得ない。故に月一回の雜誌にあつては臨機迅速に臨時増刊を發行する必要がある。又不定期刊行でも一向差支ない。これらの點から考へるに活版

の印刷よりも敏速に自由に購使し得て、その上費用を安く部数が少ない場合が少なくないので、謄寫印刷の方が便宜であると思ふ。

七、其の他。

最後に此の運動に携はる者は、労働者の難解な算術法や賞罰制度の調査等を進んで受け、組織運動者のよき協力的な任務を果たすべきである。更にブルジョア文藝雑誌の中に立て籠もつて、大衆から遊離してゐる階級的色彩をもつてゐる連中をも吾々の側に吸引し、又一方各地に散在するブルジョア文藝雑誌と連絡して、その陣容を擴大強化すべきである。

文藝戦線を如何に闘ふべきか

文學といふものに門外漢である私が、それに關聯した主題を論究せんとする所以のものは、プロレタリア文學が無産階級解放運動戦野に於いて、重大なる役割を演じつゝあるからである。尙、此處に文學青年には、文學少女をも意味するこゝ勿論である。紙數の關係上、結論より論じて行くが、現在の所謂文學青年が如何なる作品を書きつゝあるか、即ち社會的價值批判の尺度を對象とする時、彼等の作品が現代社會に如何なる意義を有するかを鋭く検討して見よう。

内山 繁

彼等の作りつゝある詩や歌は耽美主義の自己陶醉であり個人主義的思想を一步をも踏み出し得ない遊戯的作品である。文學に關心を有たない私は彼等の作品を具體的に例證して批判するこゝのてきめを遺憾とするが、彼等の創作態度且つその創作態度を醸し出す生活行動を批判するならば、彼等が詩や歌を書きその他の文藝に親しむのは異性を××する手段方法の他の何物でもないこゝである。歌會なども畢竟彼等の異性に對する陋劣な野心を満足せしめる以上の

何物でもないのだ。これらの事實は彼等の生活に幾多見出し得る。最近斯様な事實があつた。それは某文學青年が某文學少女を訪問した時その文學少女の母は「詩や歌を作る男なんて皆色魔のやうな者ですから、私の娘はそれらの人には絶対に交際させません」と剣もはらうに言ひ、その純情な文學青年は驚いて逃げ歸つたといふが、これを單なるゴシップとして笑ひ過すこゝは到底できない。これは單に一例に過ぎぬがかくの如き文學青年等の作品を社會的價值批判の對象とするこゝはそれ自身大きな誤謬であるが、我々無産大衆はかかる作品を斷じて要求はしてゐない。かく言へばさうした重要な意識で書くのではなく聖に趣味に過ぎぬ彼等は言ふであらう。然り我々は彼等にかゝる重要な期待はかけないが、此處で注意せねばならぬのは彼等の存在(敢て作品のみとは言はぬ)がこの社會に異常な害毒であり寄生蟲であることだ。即ち資本主義末期の亞流に亂舞する彼等文學青年は職業作家と共に、今や強力なる闘争に依つて擡頭し擴大されつゝある全無産階級(全無産青年)の進出を阻止せんといつゝある事實だ。だが我々は知る。この異常なる無産大衆の存在に行動を無視せる彼等の存在は職業作家と共にその存在の權の絕對にあり得ないこゝを。明日の世界に於いて必ず自滅する命數しか有してゐないこゝを。これは我々の強力な無産運動が實踐闘争に依つて明らかに實證してをるこゝだ。

此處で、私はこの一文で主題とする點に論及するが、文學を趣味とするそれ自身は決して否定すべきではない。が私の批判しつゝある所謂文學青年はいざ知らず(彼等てさへさうあつてはならぬのだ)無産大衆の組織層の内部から生れつゝある文學青年は單なる趣味の名に隠れて文學を研究するこゝを許るされぬのだ。即ち我々にあつては趣味は我々の生活(それは單なる個人的生活でなく集團的生活であるこゝ勿論)を明日の世界に飛躍せしめ被壓迫大衆を強力に組織せしめ××主義(階級)に對する爆弾たるに役立つ時にのみ意義があるのだ。故に文學を趣味とする時にも、文學はある意味に於いて宣傳的獨動的性質を有してをるこゝを鋭く認識して、全無産大衆の感情と思想と意志を結合しそれを高め、彼等の生活を集團的に組織化せしめる重要な役割を、文學青年は總ゆる機關と機能とを通じて果さねばならぬのだ。文學を我々の闘争武器として工場に農村に炭礦に都會に被搾取層として呻吟してをる未組織大衆を組織せしめ、彼等に××主義の精神を宣傳し傳播し全無産大衆の中に叩き込むのだ。文學青年は單に安價な興味性に耽れず、この重要な役割を果す時にのみ始めて文學青年の社會的意義を價值を生ずるのだ。世の所謂文學青年諸君よ!個人主義的趣味性に文學を密閉せしめ、且つ單純な戀愛小説や良妻賢母型の家庭小説に隨喜の涙を絞つてをる限度に於いて、君達は明日の世界に

必ず自滅するであらう。若しも君達が明日の世界に於いて猶、その存在を獲得せんとするなら、文學的興味性を清算し資本主義末期の亞流觀念を果敢に破壊して、無産大衆の一機構として、且つ未組織大衆の尖端を一前衛として、君達が文學の才能を無産階級解放運動の闘争武器にまで強化せしめ、血みごりな闘争戦線に躍り出せ。その時こそ、君達はブルジョアの精神を清算し新らしく輝やかしく更生し得るであらう。昭和四年七月十八日

藝術の苦笑

上州小唄のことば 尾池 眞 弓

童謡や民謡の流行から、わが群馬縣でも世の文化に之をくれば、其道の大家にお願ひして作つて貰つた唄が民謡『上州小唄』だ。折角の骨折りも餘り効を奏せず、うまぐ流しに流し流しだが、それでも其頃は、小學校の小供までがギツチン／＼とやつてゐる。こんな唄でも野口雨情作歌中山晋平作曲で『藝術』だとなれば、學校の先生や役人が音頭をこつて、學生、青年團、處女會にまで合唱させる云ふのだから恐れ入らざるを得ない。第一其節が頗る俗悪なところへもつて来て、少しも上州の氣分が現れてゐない。チツト取つて術語で言ふならば、全體を通じてローカルカラーが現れてゐない。地方色が出て居なければ、民謡としては、先づ半分落第だ。又其文句に至つても或人に言は



戯曲 夜

一九××年の冬

榛名杏二郎

第一夜  
所一富家江野邸の廣間。正面左右に屏、大小テール、椅子、ピアノ等華美なる裝飾。  
人書生 大野  
女中A 君ちやん  
娘 江野大造  
主人 田村  
客 田村  
秘書 お花さん  
女中B  
女客A  
男客A 佐藤襄二  
男客B 以下數名  
女客B 以下數名  
(女中Aと書生が當夜の會合の準備中。菓子果物花瓶等を)

書生(菓子をつつまんで食ふ)こりやうまい。君ちやん一つさう?  
女中A(まあ大野さんツツたら。駄目よ)。さ早くして頂戴。又あのガミガミやお嬢さんに怒られてよ。お嬢さんては今夜馬鹿におかしな。それに大変急いでゐるわさつときも時計を見いおかしな。こら邊を行つたり來たりしてゐたわ。こへ見る来るかも知れない。  
書生(ふん。御立派なお嬢様だ。顔の造作を鼻にかけてお轉變で分らずやで仕末に終へないだ娘ね。  
女中A(本當にさ。奥様は指環や着物に大金をかけてやれ何だ彼だ外ばかり出歩かし。日那様は旦那様で近頃は女優の後を追駆け廻してゐるし。……その娘だもの。お花さんはお畫々からお化粧の御手傳ひだわ。あの、今夜來るんでせう。  
書生(誰が?)  
女中A(はう、佐藤さんがさ。  
書生(兎貴の方だろ。さうだ。月曜に俺に招待狀をポスト

へ持つて行つて渡す時にも一番上の奴にキヌなんかしやつた。後ですぐ見たら佐藤へ宛てた奴さ。  
女中A—まあ。あの娘さんが。まあ。笑ふ。(娘左の扉より登場、華やかな夜の服装、二人を見る。)

(書生娘に気がついて女中に眼で報せ乍らあはせてそこのをいぢくる。)

娘—何かおかしいの？ お嬢さんがさうしたんです。未だ用意が出来て居ないやないか。早くない！  
女中A—はいはい。書生と共に急がし働く。  
娘—おや書生が来てないわ。お君持つておいて。  
女中A—はいはい。さうしました。(左へ去る)

娘—大野。それはあそこのよ。  
(書生花瓶を動かす。外に自働車の警笛聞ゆ。)

書生—誰か来たやうだわ。仕度直し乍ら正面から去る。  
書生—あ、くたびれた。やり切れないなあ。  
(書生菓子をつつ口に入れる。右の扉から主人と客話をつつ出て来る。書生狼狽して盆を持つて口をもぐもぐさせ乍ら左へ行かうとする。主人見る。)

主人—おい大野。田村を呼んで呉れ。  
書生—一層あはれてはい。田村さんで御座居ますか。只今。急いで左へ消える。  
客—部屋を見廻はして何かおありですか。主—いや。娘がほんの一寸、友達を招くまで。

女客A—新しいレコードあつて？ 早速かけて頂戴！ ね皆さん踊りませうよ。  
客数人—賛成！  
娘—気が早いね。昨日来たばかりのジャズのレコードが十枚ほごある筈だわ。  
(書生機を傍に客大勢よつてレコードをあれこれ取出す其間に娘は皆から離れて立つてゐる男客Aに近づく。)

男客A—此頃家に居りません。困つてしまふのですが、兄は自分の思ふ通りやつてゐるのですから仕方がないのです娘—さうなの。ではいつもの様に下町へでもいらつしやつててせう。私随分お待ちしたのですけれど……。  
じやあ島崎さんに聞いて見たら……でも今夜来てゐないわ。駄目だわ。  
男客B—(傍に来て)島崎さんは僕が誘つて見たんですが用があると言つてゐるよ。佐藤と馬鹿に意気投合したらしいからそつちの用なんだらうよ。  
男客C—マルクス・ガールにマルクス・ボーイか。い、取組だよ。  
娘—あの人達は何かあ、なのでせう。私達の仲間から何故離れて行つてしまふのかしら。  
男客A—貧しきものを救ふ爲にだつてさ。馬鹿な奴等だ。金の無い奴は働かないから悪いのだ。金のある者は遊

客—はあ。所てくさいやうですがあれをお忘れなく。申上げた通り實に兩國の衝突は間近なのですからなあ。貴方てない目目なのですからよろしお願ひしますよ。歸つてから總理に貴方の承諾された事を傳へませう。  
主人—いつも御骨折をかけて済みません。いづれお禮の方

客—いや。何なに。  
(主人客を送つて正面より出る。秘書左より登場。右の室に入る。すぐ出てくる。其時正面より歸つて来た主人と出會ふ。)

秘書—そちらで御座居ましたか。  
主人—うん。今度の儲けは大きいぞ。仕事が大きいのだ。秘書—工場の方ですか。礦山の方ですか。それとも船の方でございませうか。  
主人—さうしてさうして三つともなのだ。素晴らしいだらう俺の夢を實現する爲の金がたんまり遣入つて来るのだ。こゝも全額率をあげねばならぬ。働け！ 働け！ 働かせ！ 俺は儲かる。金だ。金だ。  
(導きさうに歩きまはる。)

主人—さあ来て呉れ。  
(主人秘書を連れて右の室には入る。)

(娘、客大勢と正面の扉より登場。女中A、B、書生機レコードを持つて之に従ふ。)

ぶ権利があるのだ。  
男客A—でも働きたくも職の得られない者もゐます。又いくら働いても足りない位しか賃金は貰へないので。それに遊んでゐて少しも働かないで食ふこゝは正しいでせうか。  
男客C—流石は弟さんだ。然し君だつて我々と同じぢやないか。さうでせう？  
男客A—だつて……  
娘—もうお止しなさいよ。つまらない。  
女客B—さうよ。面白さうなのが見つかつたからかけますよ。  
(ピクチャー鳴り出す。一同踊り始める。男客A一人考へ込んでソファに腰を下す。)

(右より主人と秘書出て来る。一同静まる。たレコードの調だけけい、い、んでせう？  
主人—い、よ、い、よ。大分集つたな。うん、騒いで呉れ俺は今嬉しくてたまらないのだ。秘書)ではお願ひする。  
秘書—はい。行つて参ります。左手へ行く。  
主人—おつ、一寸待つた。運轉手に自働車の用意をさせて呉れ。秘書—承知しました(左へ入る。)

娘—お出かけ？

主人—あ。會議さ。(女中に)おい着物だ。(主人女中と共に右手に去る。)

A—さあ皆さ。始めませう。(再びジャズに合せて……)

第二夜  
所—劇場裏通。右に樂屋口。中央より左にかけて街路、樹木、街燈。  
人—老人、劇場の雇人  
乞食の子、チビ公  
江野家の自働車運轉手、女優A、水川靜子  
同、B以下数名  
男優A以下数名  
青年、佐藤武夫  
職工の妻、お由  
道具方A以下数名  
若い男、劇場の雇人  
職工A、B

(老人は樂屋口の仕切の中で火鉢に當つてゐる。乞食の子右手から出て来る。)

乞食の子—今晚は。おぢいさん。  
運轉手—あ、お迎へでございます。  
女優A—あ、さう。ご。ご。  
運轉手—(左手を指し)あの角で御前には御待ちになつて居ります。  
女優A—(仲間に)ぢや失禮するわ。皆さん左様なら。(女優A運轉手と共に左手へ去る。)

女優B—まあうまうまやつてるわねえ。うらやましいわ。舞台でも外でもない、役ばかり。  
男優A—うらやましい？ ぢや敬へてやらうか。成功の近道は金のあるパトロンを手に入れるにありさ。お前も探せよ。  
女優B—私？ 駄目だわ。水川さんとはお面が段違なのだもの。  
男優A—さう嘆くなよ。果報は寝て待てさ。歸らう、俺は眠いよ。  
(一同連立つて右へ去る。それに入道ひに青年を抱へて登壇老人の所へ来る。)

青年—おやぢさん！  
老人—おや貴方でしたか。さうらへ。  
青年—(一連立つて右へ去る。それに入道ひに青年を抱へて登壇老人の所へ来る。)

青年—おやぢさん！  
老人—おや貴方でしたか。さうらへ。  
青年—(一連立つて右へ去る。それに入道ひに青年を抱へて登壇老人の所へ来る。)

老人—あ、お前かい。未だ今夜はお前にやるものが無いのだよ。はねたら食堂から残り物を貰つて来てやるから寒いだらう中へお入り。  
乞食の子—い、の、の、の。おや小さな火鉢があるんだね。い、氣持だなあ。おぢいさんあつちの町の方は騒がしいよ此頃は全くひびき不景気だね。人が戦争が始まりさうだなんて言ふけ本當なのかなあ。  
老人—戦争だつて。恐ろしいことだ。聞いただけで身ぶるひがする。おぢいさんの息子は戦争で死んでしまつたのだよ。又始まるのかなあ。  
(われるやうな拍手喝采も、それからあたりが騒がしくなり出す。自働車運轉手左手より来る。)

運轉手—未だだ。今日は之からホテルから砂風呂かしら。大變な會議があつたもんだ。口留めの手當を植上げして貰ひたいな。  
おい、おぢいさん。もうはねたんだらう。  
老人—え左様で。(乞食の子)もつこつちの隙には入つておいで。  
運轉手—寒くなつたなあ。(外套の襟を立てる。)

老人—全くねえ。私なごは家に歸る迄に凍えてしまひますよ。  
(男女優数名中から出て来る。運轉手帽子を取つて女優に近よる。)

まで、さうなら。  
(老人金を握られたまま、青年の後について外に出る。青年左へ去る。老人見送る。)

乞食の子—(隅から首を出し)あの人は？  
老人—親切な若い方だ。良い家の人らしいがいつも私達の長屋に來て色々世話を焼いて下さつた。礦山へ行くと言つたが何しに行くのだから。身體をこはさねばい、が。乞食の子—お金を呉れたのかい。ぢやあお金持の子だよ。おぢいさん俺に何か買つておくれよ。  
老人—よしよし。もうすぐ歸れるからな。待つてゐるよ。(中から又數人男女優出て来る。寒さうにして左右へ別れて行く。)

(右より職工の妻子供の手を引き夜店の道具を背負つて出てくる。老人之を見つけて街路で立話をする。)

老人—お由さんもうお歸りか。今夜は早いな。  
職工の妻—ええ。寒いし買れないし、それにお隣のお上さんの病気が近頃めつさり悪いから早く歸つて見て上げやうと思つてね。  
老人—さうかい。未だ悪いのは困るなあ。私達は病氣になつたらそれでよいからなあ。金が無くっては醫者にやかれず薬も買へないからなあ。お互に氣をつけやうぜ。さうさうあのよく長屋に來た親切な若い方—佐藤さんと言つたけ—あの方が礦山へ行くさう言つて今行かれ

だが、このお金をみんなへつて置いて行つたよ。  
職工の妻―嶺山へ？あの佐藤さんが。何しに行かれたのだらう。家の人はきつこつかりするよ。佐藤さん話すのが楽しみだつたのだから。それに工場が今夜から急に仕事が増えて夜業にも出るんだよ。今朝も仕事は之からもつこもつこ長くなりさうなんだつてこぼしてゐたが、さう言ふや此間も佐藤さんの話を聞くに競争が近いんで工場は増々急がしくなるばかりだか。その癖日給は上らないし特別手当は録に呉れやしないのだから堪らないつてありやしない。

老人―本當になら。毎日毎日暮しは苦しくなるばかりだ。いつになつたらいい日が来るんだ。あーあー職工の妻―私達の時はさへ駄目でもせめて子供には思つて夜店にまで出てゐるんだだけさ一向さうも樂にはならすね。ほんにいつになつたらね。佐藤さんはみんなが一所になつて力を合せてやりさへすれば世の中を直してもつこ立派にする事ができるさ言つてたが、實際出来るものかしら。外國ではやつた所もあるんだつてね。さうなりやさんなら助かるか知れやしない。待てよね。おや飛んだ長話してしまつた。お雪さんが待つてらだらう。おぢいさん。てはお先へ。正坊歸るんだよ。

老人―氣をつけてお歸りよ。職工の妻子左へ去る。老人見職工B―よし。早く来いよ。駆けて去る。  
職工A―ゆつくりはできねえがさつこかだ。實はじいさん飛んだ事がさつこまつたんだ。正吉さんが工場で大怪我をしたのだ。晝間うんこ働いた上に夜業だもの怪我をするのも無理はねえ。こんなにかき使はれちや職てきた人間だつてこはれてしまわ。

おまけにあんな不完全な設備しかねえ工場ではかうなるのが當り前なんだ。それだのに向ふては儲ける事はばかり考へて手當も録にして呉れねえ。奴は可哀想にこても助からねえ。奴の家の事を考へるに後に残るお上さんが氣の毒でな。俺あ俺達の無力が残念でならねえんだ。涙をふく氣がついて。おつこ泣いてる時ぢやあねえ。先へ行くぞ。(足早に去る)  
(老人―涙をふく。乞食の子老人に抱き付く)  
乞食の子―おぢいさん！  
老人―さあ行かう。  
今夜は私一所に寝ようなあ。  
(静かに歩き出す) (續く) 暮

### モダン文学ボーイを退治せよ

美津山 晃  
ある神社のお祭日だ。

送つてから内に戻らうとする中から道具方がさやきや出て来る。  
道具方A―やれやれやつこおしまひだ。ぢいさんも歸つたらさうだ。  
老人―へい。もうすぐ歸ります。  
道具方B―寒い寒い。早く歸らう。(一同去る)  
若い男―(中から出て来て)今夜は俺が當直だ。  
ぢいさんもう歸つては。よ、よ、よ、引込む。  
老人―左様ですか。では。  
(老人歸り仕度をして街路へ出る。乞食の子隔から飛び出して老人に走りよる)

乞食の子―おぢいさん俺を忘れちやいやだよ。老人―あはは、わすれてたよ。さ行かう。  
(二人歩き出す。左より職工A、B駆けて来る。人さ出會ふ)  
職工A―おつこいじいさんか。  
老人―急いでさへ？  
職工B―お由さんさ。  
老人A―お由さんは今、夜店から歸つたよ。  
職工A―じや行違ひになつたのだな。いけねえ引返さう。(二人戻つて駆けて行かうとする)

老人A―松蔵さん！一體さうしたんだ。  
職工A―(B)にお前先行つて呉れ。  
人は文字通りの混雑で、押し合ひつ、右往左往して居る中を頭髪をオール・バックにしたモダン文学ボーイが五、六人何か話し合ひ乍ら人を分けて行く。トある一女性を見附るや此の一團ツカ／＼その女性の側に群り騰寫版刷の小雑誌を各々懐から取り出した先づ第一番に口を切つたのが修養會(修養神の讚美を名として實は猥らな男女の交際機關)で尊名高い高橋某  
『文學の解らない奴は氣の毒だよ、然し此んな雑誌でも仲々骨が折れてねえ。  
『然し骨の折れる所に吾々文學青年の使命があるんだよ』  
斯う云ふのは自稱御大の茂木某。  
×社の同人には理解女流詩人が澤山居るので愉快ですねえ。

續いて饒舌るのは平田、島田等の助平詩人。  
此が彼等の女性誘惑の常套手段である。  
神を信仰し、美を鑑賞する、その事は決して悪い事ではない。又女を誘惑することも悪い事ではない人間の祖先が皆やつて来たことだ。只彼等の詩や歌が女性の誘惑が社會の事實を曲す、資本主義の没落と社會××の根本を否定せんとする反動思想だからである。人類の歩みに抗せんとするモダン文学ボーイを退治せよ。



### 創作 檢束

磯田 沙路

正木が郊外××署の留置場第三號室に、李と同じ差入れの辨當を食ひ同じせん布圍の下に注意されることになら、彼は生涯主義者云ふ名の下に注意されることになり、生活することが出来たらうか。否、恐らくは彼が共鳴した主義者李と共に、その計劃を進めずそのイザムを研究せず彼が李と共に一夜を同じ留置場に閉すことがなかつたにせよ、彼が××署の留置場になつたからには、彼は立派に主義者云ふ名もに注目されて、彼の外出には常に犬の横な〇〇がついてゐるにちがいないからう。  
東京西部郊外の六月は青葉若葉の匂ひが、新鮮な風につて来るにしても、むし暑い日が續いて、女の姿が日々美しく肉感的な魅惑を持つてきてゐた。空氣は一割の白粉を含んで、甘い感覺の中に處女の匂ひが鼻を刺戟する程だつた。殊に近代家屋の多い中野の町の女の眼は、魅惑を中心として、高麗の舞踏をし、彼女達は街の花形氣取りで調歩してゐた。その露骨な官能の過剰に、街をゆく男達は

折しも支那の戸をがう／＼開いて入つて来たのは、夏の白服もまだ新しくズボンの折目も正然とした若い警官だつた。『正木に秋田はるるか警官の聲ははがらかにひびいた。『僕が正木です』『署まで一寸』若い警官はなれなれしくも彼に同行を迫つた。『今何だろ、月給でこんなと云ふのかね……』半は冗談に半は眞面目に正木はこんなこんなことを云ひながら、多分社長のこゝしについて何か話があるんだらうさ、秋田に語りながら××署に同行した。  
けやきの若芽が軟い風にフレッシュなかほりをのせてきては、たまらない程正木の胃袋を刺戟した。道をゆく男も女も二人の警官も同行してゐる彼等を遠くもふかへつては見返してゐた。××高女の生徒の一團が軽やかな足さくで丘の細道を歌つて行くの、正木等一行は十字路のところでびつたり出逢つた。『あの方達まだ若いのにさうしたんでせう？』一人がさ、やけは『あの方達髪長の毛が長

いね『長髪の人』『あらいやだ補さん、何だかおかしいわね』『あの方さつこアナよ』正木のなみならぬ長髪が彼女達の會話の中心となつてゐる。彼は黙つてかすかに頬笑みながら、警官の短かな劔に視線を落してゐた。  
××署の裏門から刑事室に通された彼は、殺風景な、うるはいのないこの部屋に一輪の花が欲しいさへ思つた。  
『僕正木ですが用件云ふのは何でせう？ 忙しいんです』しばらくして正木は口を切つた。『あ、君等が今警部が居ないからしばらく待つて……』外に何の話も何の調べもなかつた。正木は秋田は刑事に案内されるま、に従つたそれは彼が未だかつて見たこともない、そして想像したこともない留置場云ふものだつた。小さなさ、けた木の板に横にしたその名が、れてゐる。その下のガラス戸を開けた刑事室に入つた。『一體何だい、こんなところで待たせるのかい？』『黙れ！』刑事の言葉はもうさつかり變つてゐた。それは牛馬を虐待する別當の様に留置場にある人間共に對しては、絶對的の權力者であり、絶對的の弱者だつた。二人の警官がうやうやしく刑事に禮して、その顔色を伺つてゐたが、『即』云ふ刑事の冷たい言葉が滑って彼の姿が見えなくなる。警官は今度は俺の天下さばかりに『姓名は？』『年齢は？』始めだ。問もたなく、黙つて二人の警官は正木に秋田の着物を脱がして紐らしいもの金屬らしいもの全部を取つてしまつた。これは留置場の中で自殺されない様

にする爲らしい「馬鹿野郎誰がこんな處で自殺なんかするものか」心の中で正木はこう思つてゐた。第三號室にいふ金あみ張りの部屋の小さな扉があいた。そして正木はその中に押込められる「ガザン」冷たい金属性の響をきいた。扉は閉ざされ、正木は囚人になつたのだ。何だ、人を馬鹿にしてやがるな。即ち即ち即ち……そして人を留置場の中へぶち込んた……即ち即ち即ち入らう……心は騒動からこんなことをつづやうしてゐた正木に「まださうか」でない、やまかましてはなないか。水でもかけてやらうか。これこそほんまに檻の中に入れておいた獣も同様だ。動物園のけものなら日なたに出て食を興へられ、戯々しい子供の顔も見るこゝが出来る。この中間はその點から見ても動物園のけものよりもひさかつた。彼等をおこづれるものは寂莫として恐ろしい犬のさなり聲だけだつた。太陽の光りは少しも見えないで淀んだ空気がいやに臭氣を漂はした。

××署留置場第三號室……そこには主義者三云ふ名目のもこに檢束された六名の異國人がゐた。一番年長らしい李は、正木が入るさなつかに彼に事の理由を尋ねた。正木は何等理由なき不法監禁をつぶさに物語つた。その聲がまた高くなつた。見えて「第三號室やかましいぞー」あこはまた恐ろしい静寂さにかへつた。前の第二號室にゐる金

ないよ。こゝ彼は言葉をつ結んだ。それから彼は一言添へた「君の復讐は僕がきつてあげよう」李は兩眼に涙をばいいた、へてゐた。正木はしつかに李の手を握りしめて留置場の隅にす、り泣いた警官はだまつてベンを走らしてゐたが時々コクリ／＼居眠りを始めた。金さんの美しい横顔が淡い電燈の光りに照されて青白く……彼女はうつむいたま、何か深い思案に更けてゐた。正木はその夜一枚の布団に李を包まれながらも、故郷の年老いた父のこゝが想ひ出されて眠れなかつた。彼はその時からもう堅い／＼決心をきめてゐた。「俺だつて男だ。何の理由もない侮辱を、こんなに苦しめる警察に對してだまつて居られるものか。主義者だ。逆逆者だ。僕は小さな主義者だつたが今から立派に主義者になつて、彼等に復讐せねばならないのだ。正しいこの爲めに、吾々プロレタリアのために、闘きよめる、爲めに、僕は主義者になるのだ」ふるさとの父よ、戀人よ!!そして神よ!!この正木の決心を何て誰が否定出来る、何て誰ががめ得ようぞ。

朝が来た。留置場の朝が……小さな鐵窓をのける朝日がさんなにかこの中人々にはなつかしかつた。六月の太陽の風は新鮮な川魚の銀の腹の様に輝いて、かんばしい若葉の匂ひを運んでくれるがそれも僅かの間だ。一ぱい水で顔を洗へば、朝食が亦四角な穴から運ばれる。金さんが可愛く白魚の様な手で朝の湯をばいひなみ／＼こつ

三云ふ美しい少女が頬笑みながら、その澄んだ瞳を李のそれに向けた。二人の視線が會つたとき二人はいつ／＼光つてうづむいてしまつた。薄暗い電燈の光りにぶく光つて、惱ましげな夜がこゝせまつた。薄暗い鐵窓にもおこづれて来た。水分をばいひ含んだ白木の小さな器に、飯と混布の煮しめが少しばかり入つた夕食は、四角な穴から七ツ入れられた「今日は一つふいたお湯が喜んぶるかも知れない。赤い夕食だ。一切のパンを三疊の机の上ではばつたゆふべの夕食の方が、されだけ暖かいしかつたが知れない。だが今朝から一食も取つてゐない彼の胃袋が承知しなかつた。誰も誰も一粒も残さず食ひ終るこゝ、これから長いかなあ……」李はあく／＼をかいたま、小さな聲で語り始めた。彼は××から日本に來て働いてゐるが、ある事件以來主義者三云ふ名目のもこに市内外四十四の留置場に檢束されたこゝで……まどうら若い十八の少女まで……彼はこゝまで物語ら、泪にぬれた聲で「僕は必して日本の國に復讐は持つてゐない。たゞこの政治が氣にいらぬやうに僕達を苦しめるのか?僕は現在の警察が僕達を苦しめるやうに苦しめ、そしてさうな僕達の様な主義者を造つてゆくか數知れぬ程あるだらうと思ふ。君なんかその一人なんだ。だから僕は死んだつて××主義はやめ

て呉れた。皆はよろこんでそれを善先にさあつた。金さん」正木の小さな聲が彼女の耳にもこぼれた。「なあに?」アクトの變つた言葉で彼女は答へながら、彼の顔をぢつと見つめてゐた。その顔には何處もなく寂しい何ものか秘められてゐた。正木の顔はしきしまつた決心の色、顔面筋肉を緊張させてゐた。それから「李君、正木は呼んだ李はだまつて顔をあげた。僕は今日出されるかも知れないが君も出たも金さん是非訪ねて呉れ」警官の朝の交代時間にこれだけの話しをを終つた彼等は、食を終へた牛の様に足をのべて鐵窓によりか、つた。「人員點呼だ」代りの警官が名を呼び始めた。「李」はい「三云」はい「雀」はい「正木」……最後に彼の名が呼ばれた時、正木はしきしまつた。最後は「お」三云ふ解らない復讐事には怒りが満ちた不平が漲つてゐた。正木、馬鹿野郎何だその返事は、もう一回だ。こんな時從順にしてゐる方が得策だ。三云に致へられた正木は「はい」直ぐ返事をしようかと思つたが、氣短かな彼はそれさへ出來ず「何て俺を入れたんだ」馬鹿野郎、入るやつが馬鹿なんだ。警官はそのま、出て行つてしまつた。「入る奴が馬鹿だ……」入る奴が馬鹿だ……」正木はこの言葉を何回もくりかへして、あまりにも不合理な矛盾した彼等の言葉によ、反感の煙を燃やし、その感情を強めて行くのであつた。

晝がまた例の如く過ぎた。夕方近く「正木秋田」三呼ばれ

るま、二人は警部の前に立つた。いかめしげに椅子に腰をすえながら、シートをくゆるらしてゐた警部は「お、い、正木、君は困つた奴ぢやな、お前の處の社長がお前は、〇〇〇〇に加盟してゐるこゝでゐるが本當か?」それに社長に對して暴行を働いた三云ふぢやないか?」決心の色を兩は、に浮べて正木は答へた。「はい、唯かに〇〇〇〇に加盟してゐます。そしてそれが悪い三云ふのですか?僕は正しき事の爲めに、弱者の爲めに、そしてプロのために味方になつて、あくまでも不正な強者を敵として戦つて行く考へなんです。馬鹿、だれだ、あこはだまつて出て行つた警部のあこは彼はうらめしげに見送つた。おい正木、こんな處ぢやうまく言つて歸つた方がい、よ、秋田は三十の坂を越えた妻帯者だけあつて、こんな事を云つてゐた。再び六法全書を持つて入つて來た警部に、「さうも私達が悪う御座居ました。お許しを願ひます。秋田は幾度も幾度も頭を下げた。ケイ部は得意になつて「う、う、う」つけてゐたが正木はしやくしてしやくしてたまらなかつた。やがてケイ部は言葉で「今後は絶対に〇〇〇〇に關係してはいかんで、今日はこれで歸してやるから、以後は氣を付けて」秋田はまだ頭を下げてゐたが、正木はだまつて、すわつたその兩眼でケイ部の顔をにらめつけてゐた。

留置場を出た二人は、郊外の夕暮近く同僚の家に急ぎながら、正木は戀人のこゝを、秋田は妻のこゝを考へねばなら

らなかつた。彼女にこの事を話そうか話すまいか、正木の悩みは秋田の妻のそれに對するよりも尙大でなければならなかつた。「歸つたか正木……こゝでも心配したよ」同僚の二階に通された彼は、やせかけたほ、に寂しい笑みを浮べながら一座を見渡した。そこには意外にも正木の戀人である〇〇〇〇女子大出身の幸子もゐた。諸君、心をかけてすまなかつた。だがならない事なんだ。僕は心云つてもしやくてまたらがない。今度こそは僕はほんまにだ。正木の顔に、赤い夕日が輝いて雄々しく、その言葉は僕へおびて物凄かつた。然しその間にも彼の視線は常に幸子に向けられて亂れてゐた。明日の會合を約して阿佐ヶ谷の下宿に歸りゆく、彼幸子の姿を秋田は泪がみながら眺めて、今夜の妻の顔を思ひ浮べたのであつた。野道を行きながら幸子は、正木にびつたりと寄り添つてこんなことをつぶやいた。「貴方どう入つたのね、それでこぼんさうに労働者の味方になれるわ強い、然して偉い人にね、妾、今日はほんまに貴方が前よりはすつたものしい、方に見えてよ」幸子の意外な言葉に、正木はあるうれしき驚愕を感じながらも、ふるふる手て彼女のやさしい手をしつ／＼握りしめた。(完)



### 曲戯 國定 忠次 一幕

### 赤城 甘人

場所 佐波郡國定村之實家  
期 甲州の旅より歸つた翌日夏の末頃  
人物 忠次の子分圓藏、淺太、等及國定村の百姓多勢

三年來續いた不作に百姓は極度にその生活は疲れた、今年も又旱天に續く旱天で、植付けた稲は枯死せんさしてゐる。此の悲惨の状況、この慘憺たる光景は實に目も當てられず、畑は白くなり、作物は赤くなつてゐる。

水一水一水。百姓の求め願ふものは只水一それのみであつた。この不作にか、わらず上役人は年貢米取立にはすこぶる厳しかつた。それが爲に百姓の生活は極度に疲弊し衰退してしまつた。隣りの左平の娘は佐野の遊女屋に賣られ、年貢米の代證にさられ、源平の娘も本庄へ賣られる始末である。それでも上役人は少しの慈悲もなく年貢米

の取立を厳しくするのみならず過重なる税すらかけて來た。

南向きの忠次の居間、忠次の妻おこく、忠次の子分四五名が甲州の旅の機々の追憶に花を咲かせてゐる。その時百姓多勢、もみ手で腰を屈しつ、登場

百姓一人「今日は」  
忠次の子分奥より出て來る  
子分「誰れだい」  
百姓一同「へい今日は、親分はごわすか」一同お辭儀する子分「一寸待ちねえ」三云ひつ、奥に入る。  
忠次代りて片手、ドウランを掲げて出て來る  
忠次「お、村の若い衆か、よく來て呉れたね、さ、さ、まあお上り(間を置いて)おこく蒲さんを持って來い」奥より、おこくの聲「はい、百姓多勢さやさやさ上る御免なさい」御免なさい」異音同音に云ひつ、忠次の奥の部屋に

通される。百姓一同坐る。天上を見ながら「い、景色でござるなあ親分」  
忠次 「まあ皆んなの茶さうだね長らく家をあけてすまなかつた。さうだ家の方は、ずいぶん暑いやなあ」  
百姓一人 「お暑さ。さてもやりきれませぬや。この天気では」

忠次 「さうだなあ、これでは水が不足するだろうしなあそれに作物のためにはよくなからう」  
百姓一人 「親分は不足するし、さうの話しじやござんしな、水なんぞもう一滴だつてない始末だ。見しやつせいな、田なんぞ皆んな割れてしまつて、又今年も米が取れやしないよ」

忠次 「さうだなあ困るだろう」  
百姓 「親分困るだろうさうの話しではござんよ。はあ、俺が生活はちも二つも動きが取れなくなつてしまつたのでござる、隣りの李平の娘しま女も源公の娘さまも昨年の秋に女郎に賣られる始末でござる」

忠次 「少しせきこんで」なに李の家でも源の家でも尼子を女郎に賣つた、馬鹿な真似をしやがるなあ、今働きの盛りの娘を女郎に賣つて何するや、すぐ困るやな」  
百姓 「處が親分まの聞いて おくんねえな、誰れだつて可愛い娘を女郎になか賣りたくねえがそれもしかたがねエでござる、又尼子にしたつて泣き泣き行つたんでござる」

忠次 「なにこの上はお前達を苦しめて、ふん、さうでは強慾無道の役人輩だ、かまふこねえや、この忠次が居るうちは力にかけても納めさせね、役人共人間なら百姓も人間だ、位に二重はあるけれど人間に二重はねえはずだ。血を見てまでも此の忠次さうして前達のためになつてやるからなあ安心しやつせ」

百姓 「眼を二重に忠次に向け嬉しげに微笑みて一同親分有難うござる、有難うござる、何分頼みます」  
忠次 「うん安心せい、けれどなあって前達は皆んな一緒になつて事にあたらねば駄目だぞ、役人の一人二人はたゞ殺してまでも、お前達は生活のために一緒になれ、一同顔を覚えて」源さうだ、い、うん俺れや死んでもかまわねえ、俺もこんな苦しみに會ふなら死んだ方がましだ」  
「俺もさうだ、それは親分に契ふよ、それがよかんべ」  
「さうしよ、よかんべ」

百姓 「親分俺等は死んでもかまわねえ、皆が生きたるならば、俺を殺されてもい、ござるから何分よろしくお頼みやす」  
忠次 「さういふ合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」  
忠次 「うん、合點だ、親分何か用かい」

忠次 「ふんそれには何か仔細があるか」  
百姓 「ねえ涙ぐみ、親分俺らは、こ二年前想ひ出せば親分が旅立つて直ぐのあの年から、こ二年来た代官は、あまり無慈悲で俺らが村百姓五百名が天災續きて米も取れず苦しんでゐても平氣の平左で年貢米は取立てますのでござる、少くも口答せばすぐに赤石の牢屋に入れるなど悲道の極みをつくしやす、のみならず昨年でござる、李平も源公も川の下の田がありやす故に米が一粒も取れずいたため年貢米が上納出来ず、俺等が哀訴しやしたら、上役人奴(間)を置き涙を流して泣く、口惜くござる、まかりならぬ云やして俺はそれとなく源公も哀れと思へ、やりならぬ云やして御願願に預りたい泣いてお願しやしたら百姓の分在にたわこ云ふな、俺は口惜しいが三日ばかり獄屋に放り入れやした。それでしかたなく李平も源公も女郎に賣つた次第でござる、忠次は齒を口絞めうてを留めて考へ込んだ「ふん」さうだつてしまつた。百姓一同は皆すくみ泣きの聲がする。

百姓 「それでも親分、い、ござる、又今年もこの天気でござる、挿付けた苗もあの始末指をさし示すでござる」  
忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」

忠次 「(眼を開いて前の田圃を眺めて)ふん、又だます百姓、年貢は納めねばならぬ、今年も又お殿様がお江戸へ上洛さかするのて旅金がかゝるので昨年より餘計に金を出せ、庄屋の孫左衛門様からのお達しでござる」



### 断片

磯田 沙路

きるためにお前さん達は上役人共の用を達する必要はねえだ。上役人共の用を達するに先づ先にお前さん達自分が氣強く生きてからだ。い、か、俺わ、お前さん達の粉になつてもかまわねえ、来年まで東の原に水池を掘るべーや、い、か、さうしてあそこを水溜めて置けば乾いたつてあの水で用がたまるから、そのため俺等の仲間を頼むのだ、お俺さん達は一心にあの土を掘つて水をたまるまで働いて呉れ、俺はそれが頼みだ、忠次は口を断つた、百姓一同にも決心の色が顔にありありと浮んで来た。さうして忠次の家を出て行く百姓は思ひ／＼に大地を踏みつ、心の中で叫んだ。さうだ俺達は欺されてゐたのだ俺達の生きる道は俺達自身の力強い一掃の備だ、ミロささびながら、白む太陽の光を浴びて家路へ歸つて行く、今日の太陽は赤々としてゐるけれどもなんともなく百姓達の眼には輝かしく見えた。「役人がなんだ俺達は俺達の生きたるために地を掘り沼を作るのだ」大地は赫々たる太陽の熱に燃され暑い、百姓の人々の胸に燃る長らくの壓迫に對する反逆の情の様に。

幕

### 新君戀し

K・M 生

- 一、宵闇迫れば 惱は淫なし 映つるは何の影
- 飢へたる心に 飯戀し 唇あせ果て 生唾あふれて 今宵も更け行く
- 二、うさん屋過ぎ行く 足跡ひびき 明日の米代 飯戀し 空腹亂れて 誰をば恨まん
- 三、去り行く自動車 肥へ行く資本家 誰ため働く 疲れし身體よ 飯戀し 灯うすれて ぬるむも淋しや

### 牢獄にて

渡良瀬 潤

世の中で酒に女はかたきだ書かれてあつた留置場の壁一粒も残さず食つた飯碗を手に持つたま、ちつと見ている受持の看守さ語る生活難ひきい寒さだ外は吹雪だ、擗の外で小供のさわぐ聲がする雪の降りそうな静かな夕方、味噌汁の湯氣をみつめて嗅飯の號令を待つ寒い冬の朝、炊事場の煙突の煙はゆるく立つて静まりかへつた監獄の午後、運動場の隅に咲いてる白椿さびしげな花だ監獄の庭だ窓の下に芽を出しかけたはこべ草日ごみに伸びて春が近く人間の世界にこんな監獄さいふ不思議なものが何故あるのだから

惨めなれども

藍澤 要

さうしてもいやな仕事もせにやらぬ生れし因果を考へてみる
親達に遊いて何故に悪いのか俺には俺の生くる道がある
だまつてゐる俺の憤怒を知りもせず柔順なぞこたはけを言ふな



手紙の因果片々

中村 庸吉

いぶかしき心のさまよひにくさよ 手紙の因ぐわしにくく
幻影に やぶれていつく旅ゆかむ 長野の驛のたそがれるころ
天上の五雲の因果いさらしに しみて泣かるゝ人間のあぢ

追憶

遠山 麗子

叱られて涙ぬぐえる指先で 曇る玻璃窓に亡き母こかく
雨がさを肩にて くるり くるりくるり 友の微笑み見て

心の断面

檜 信一

た、生きるそれだけのこゝに苦しんでるこんな世の中を誰が作つた
内閣が變つたつて俺達の生活が樂になるぢやあないそう思つて仕事をづづける
誰が遮らうたつてそれは駄目だぞ見ろ俺達の血は休みなく

たへがたき熱情

鈴木 富士江

秋雨の 煙るあの日指きりて 別れし君より訪れもなし
さゝめきの 巻のがれて水邊に 来たれば露にこもしびはうるむ
かろき酔ひに語る言葉もちりきけて相よる火鉢火は消えて

×

羽尾 島子

しほりつゆ降る日ぐれのカイ道をぬれつゝ走るから
自動車の



詩

午後寸描

野守 知象

拾銭のニッケルが マカロニの焦げ臭い食堂の敷石に
フ、ン、忘れやがつた、ミ言つてゐる
アパアトメントの午餐はムツチリした

BUILDING

すが目の虚子は 羨望を哀願して見つめてゐるのに
職に塗れた俺は 甘つばい臆びを堪えて
『ちえ！ 又降りか！』便所の戸をあけた。

春の犠牲

桃の木の葉影に 私は瓶の水を捨てた
水はポリウシア群島の地圖の模様を描いて終つた
散り残つた花びらのひびきを――

銀座裏にて

沖 黄

をしてゐる ひるまがり
奥さんは百貨店にシチウ鍋を買ひに
佛國製の白粉を經濟的に塗布して
ウビガン香水を浴びて 孔雀のやうに腰をふり

閨房にて

沖 黄

薄雲はガラスの蓋
マネキンガールの髪の毛は分列式だ。
一本の ウエストミニスターミカルモタン
電車は架空線下で爆発する。

オランダ風の 時計が鳴る  
彼女は未だに寝返へりをする  
襦の扇子が要を紛失する。

パバイヤムに猫の熟睡——  
影の交錯に 織びんの裏劇  
灰の中から春らしいオレの笑顔も

禪坊主の書體ぐらゐに すぐたものぢやねえ  
シンホニツクマーヴェルの巍立！  
新民論の符パンをくゆえ銀 釘の尖端は 斷乎こして  
神經質——

彼女はまたも勇敢に寝がへりを。  
ガイ路樹の生命の躍動を受胎する？  
オレの影もすてたものぢやねえ！  
さうだ。さうだ！ 早春賦の一章を  
オレは 彼女の 乳房を祝福して  
あたりまへぐらゐの心で書こう。

### 蜜 蜂 は

蜜蜂は水仙の莖に接吻し  
ひいらぎ は墓石の呻吟を聞く

沖 黄

### 夫に贈る言葉

須 瀧 子

お前さんよ  
私しや お前さんの戀であるらうだけ  
で  
うれしくつて仕様がなないよ  
ね!! しつかりおやりよ  
お前さんが  
そら その赤銅色の皮膚から  
その肉がザクロの様に碎けて  
小氣味のよい××が トクントクツッ……  
奔流する時  
嘘で固つた此の大地が  
根こそぎ引ツくり返る時なんだよ  
ね!! お前さんシツカリおやりよ  
長屋の子供が 小作人の餓鬼が  
南京米も喰ひ兼ねて  
コミ瀧を漁つたり  
畑の泥入參を嗜つたりする姿を  
忘れちゃ駄目だよ  
奴等に對する反抗し檢惡に

雲は辣腕家の胸のやうにくづれ  
遠い 港の 汽船のボ——  
樵天よ 山火事の延長を見よ  
しづかなる日本の 兎こにも

### 桃 林 に て

沖 黄

花舞は鼓動し 瞬間におち  
あなたは ほんやり 土をみる  
焦燥の心を包んだ ねり絹の あなたの肢體！  
けれども をずくふるへてゐる。  
窓をあけ アルコール袋を乾し  
風の加速度を放棄しなさい！  
暖房の 孔雀の裾もようをちぎつて  
あなたは あまりに 護身家になる！  
山 谷 沼 湖 風 光りに  
幹の明るは生長がある！  
あなたは  
風船のやうな花舞ばかり期待する。

この長屋へはこび込まれたら  
私はお前さんの尻の枕下で  
ありつたけの聲を絞つて  
勝利の唄を唄うからね  
そしたら  
お前さんはキツト  
心持ちよく往生してくれるだろうね。  
一九二九・十二・二〇

### 歡 喜

遠 山 麿 子

しげみあふ青葉の下の小川は  
七月の葉洩りの光に輝き  
青きそよ風にさなみして  
流れ去る水面の彼方に  
ドツミ起る歡喜の聲。

### お 人 形

ねえこれ！私是一寸お父さんを振りか  
へつた。  
され！ 此の大きい方がいい？  
素的に大きな聲  
誰かがクスリ……

たまになくなつて飛び出しちやつた私  
あ……やっぱり私は……  
あるお人形屋の前で。

### 工業地の朝

吉 田 三 子

静なはずの朝なのに  
工業地の朝はうるさい  
豆腐屋の聲  
納豆屋の聲  
荷物を満載したトラックの騒音  
カラの運送がガラ／＼  
やけに音をさせながら行く  
モーターのうなり  
ベルドのヒキキ  
かうして工場地の朝は始まる

### 酒に眠りを求めて

海 老 原 武

僅か一人の女のために  
心よ、いつまで悲しんでゐる  
さうせ女は薄つべらなんだ

### 俺れ達の仕事場

村 田 一

はあ四時だぞー起きろ!!  
いやでも應でも起きなけりやなんねえ  
だ  
俺達百姓にや寝坊するひまあねえだぞ  
起きろやろ！地主の搾取場！耕作地  
へ出掛けるんだ  
お、廣れえ耕作地だ  
見ろ！兄弟よ眞黒く土によごれた  
赤銅色のつらあして 皆んな××場  
の中へ吸ひこまれて行かあ  
たがこん中こそ俺れ達の××場になる  
んだ  
しばらくの辛棒だ  
しつかりやろうぜ。

### お、牛車よ

菊 地 盛 男

見すばらしい牛車よ  
お前は何處へ行かうとするのだ

### 道 草

H 生

静かな宵闇を  
つかれた身こ  
つかれた心を  
引づりながら歸る。  
闇の夜より流れる  
愛のコーラスに  
酒の香りに  
またも心はゆらぐ。



お前の行手は

険しい山だ  
深い谷だ  
イバラの淵だよ。

あらゆるシヨウガイがお、はれてるるのだ  
お、……然し牛車よ

俺れはお前の果敢な闘争力を知つてる  
お前の離りした足ざりて  
俺達をば乗せてつてくれ!!

暴風の嵐も  
シユン險の山道も—

新しい俺達の時代が来る迄は  
お前の離りしたねばり強い足ざりて  
俺達をば乗せてつてくれ。

### 仕官式

シドノ マイケル

若い元氣な農夫と翁者者三徳治屋  
醫者からなる 開拓者の一隊の乗り組  
んだ

輕快な帆船がごまき わかれゆく岸  
河口州の先祖の墓地で盛大なる  
仕官式を行ふため いかりを投げた

やがて皇帝の名に於いて たか／＼と  
仕官状が讀み上げられ

船首には紋章の珍らし  
金の釘が打ちこまれ轟く砲聲のうちに  
宣誓し其等の箱をばちりしめる

老母愛人の抱擁を残して式を終り  
千鳥むれたつ出帆はなつた

軍艦艇うでを組み 船長は  
潮風に向つて發遣を命令する  
數多の若者 手を揚げ手を振りつ、  
あ、その過まじき精神をうちふりつ、

無人島にサンゴシヨウミ青海流をわけ  
てあきあきする航海の終り

高原に富んだ新領土がある  
野牛と土人 開拓に選ばれた  
美しの彼等よ

旅行のたしなまに じつかりと  
並ぶ立たるその雄圖を何と云ふて祝願  
この壯快なる仕官式を  
お、何と云ふて呼びかけよう

### 前橋行進曲

矢久留万草

(1) 昔戀しい縣廳のお濠

戀のさ、やき誰か知る  
キスで別れて涙で更けて  
明けりやお濠に春の雨

(2) 戀の前橋あの榎町  
泣いて文かく人もある  
いつか片身に貰つた指輪

せめてあの娘の思ひ出に  
(3) 廣い前橋戀ゆめせまい  
第二公園忍び逢ひ  
あなた岩神わしや田中町

戀の近道ま、ならぬ  
(4) 夜見世みまじよか  
お茶飲みまじよか

いつそ電燈で逃げまじよか  
變る前橋八間道路  
月もステーションの上に出る。



### 筆隨

尾池眞弓

### 現代青年の型

思想的傾向から観た現代青年のタイプを幾つかに分類して  
みる。先づ第一は、何んの不平も不満もなく、従つて大  
した希望があるわけもなく、性慾も食欲も推し進  
められて、只運命の命ずるがまに、其日／＼を生きてゆ  
く至つての、只運命の命ずるがまに、其日／＼を生きてゆ  
く運動會の時にだけ引張り出されて角力や砲丸投の選手にさ  
せられたり、八木節大會に出て二等位になる事がある。  
第二は「雄辯」や「キング」に出る立志傳や成功談の感化を  
受け、努力次第で何んにも成れると心得、刻苦精勵常に  
大政治家、大實業家を夢みて所謂成功熱に浮かされて、青  
雲の志やみがたき英雄崇拜青年、この型は明治時代に最も  
多かつたが、資本主義の發展につれ千人に一人も故郷に歸  
が飾れなくなつたので、最近では夢から覺めた者が多い。第  
三は、少し頭の良い方で、人生がさうの、死がさうのミ  
云つて、宗教だ哲學だ、石丸樞平だ、倉田百三だ、タゴ  
ルだ、轉々として安住の地を求められぬ、サツパリ

### 『上毛大衆』昭和四年九月号 (発売禁止) 掲載文芸欄

昭和四年九月二十日印刷 昭和四年九月二十五日發行 (毎月一回發行)

第二卷第八號

一月十號

# 上毛大衆

JYOMO TAISHU

反動波に内閣と無きものや 佐野の  
きたりしや

### 社會運動者論語

プロレタリア解放運動にたづさはる者の間に、偶々個人  
的問題や感情問題から、紛議の起る場合がある。勿論其爲  
に社會全體の發展の法則までは動かさないが、我々は其の發

展の過程に於て成るべく無駄を少なくする事を考へなければ  
ならぬ。即ち漫筆子が、偶感のま、「社會運動者論語」を  
草する所以である。

未知の人々に對し、自ら誇らんとして、己れの功名  
を吹聴し、同志の惡口なき言ふは、最も恥すべく、慎しむ  
べきことなり。

堅固なる信念も有たず、徒らに左翼的言辭を弄し、  
自ら左翼の闘士に任じて得たるは、氣分屋的左翼なり。  
最早議論の時代にあらざる事を悟るべし。

彼れは芝居を觀に行きたる故非階級的なり、彼れは  
金時計を所持するが故にブルジョアの的なり、直ちに攻撃  
するは小兒病なり。其如何なる立場に在るかは、如何なる  
階級の爲に戦ふかに依つて決せらるべきものなればなり。

個人的の問題に對しては、寛大なる態度をとり、強  
ひて干渉すべからず。其事が一般に影響するこゝ大なる場  
合は此の限りにあらず。

他人の缺點や秘密は、絶対に暴くべからず。誠意を  
以つて私に忠告するは別なり。

戀愛問題は成るべく避くるを可きすれども、時に已  
むを得ざる事なれば、無闇に咎むべからず。其當時者に於  
ては、一私事なる事を銘記し、他に迷惑を及ぼさざる事を  
原則と心得べし。

ちに焼き捨つべし。保存するは禍の種なる事あれども益することなし。住所氏名等は暗記すべし。  
——スパイに對してはつめて沈黙を守り、餘計な事なき言ふべからず。無抵抗の抵抗を以つて最高の戦術なりと心得べし。  
友誼團體は成るべく共同戦線を張るべし、殊に選挙の場合には、極度までの譲歩をなし、對立候補を避くるを以つて、階級道徳の一つの心得べし。  
——金銭上の事は正確を旨とし、身體の健康については常に注意を怠らず、主義主張の反する者も、素りに之

文藝論陣

我々はかく批評する

島武吉房

「藝術的價值」と「社會的價值」の問題に就いての論争は中央文壇に於いては既に解決されて了つた。が上毛文壇では未だ其れをしつかり認識した人が甚だ少い。  
故に我々が一應上毛文壇に發表される作品に加ふる批評の基準をばつきり仕て置くのは、決して無意味では無い。

我々は或る作品を批評する場合にプロレタリアートの見地よりして見る。だからプロレタリアの仕事の發展と勝利に助力するすべての作品は價值があり、さうでないものは價值がない。(ルナチヤルスキイ云々)  
女學生間に價值(?)を認められる針谷章三君の民論も、

我々の側から評するならば三文の價值すら認められ無い。認めては不可ないのである。  
平井晚村の作品が如何に「藝術的」で有つても我々はその作品の「藝術的價值」を認め無い。勿論晚村の作品が「藝術」で有る事は認めはする。が「價值」は否定する。  
作品が社會に及ぼす影響——其れをよく注意して批評しなければ不可ない。  
技巧が如何に上手で有つても、作家の「主材の選擇」や「世界觀」等々が悪ければ我々は其の作品の「藝術的價值」を認め無い。  
何故ならば「藝術的價值」は常に「社會的」でなければならぬが故にである。  
藝術は其れ自身が如何に立派なもので有つても、或る他の手段を達成する爲めに役立つ無ければ「價值」を獲得する事は出来ないのである。  
同志大野が「いたち」創刊號に發表した「女工」は社會的に有意義な作品で有つた。故に「女工」の「藝術的價值」は充分にある。

しかし最近の上毛新聞文藝欄に發表されてゐる處の元宮完一君の「疎茂左衛門」は社會的價值ある主材を作者がプロレタリア・イデオロギイの獲得が無い爲めに、非常に反動的なものも成つて了つてゐる。だから我々は此の作品の「價值」を認める事が出来ない。し其の作品を排撃しなければならぬのである。  
私は「或る他の手段を達成するために役立つ無ければ其の藝術は價值を得る事は出来ない」と云つた。では何故、其の作品は「藝術的價值」を獲得出来ないのであらうか?  
「我々がかつて、今一般に用ひられてゐる『藝術的價值』なる言葉は實は『藝術性』のことであつて、價值以前のものである。(近代生活八月號藏原其れ故『藝術性』に「價值」を附與するには其の作品に「社會的價值」が有らねばならない。一般的社會的價值から獨立した『藝術的價值』など云ふものは存在しない。(前掲書藏原)  
藝術作品を批評する場合、政治的部分と藝術的部分に分けて見るのは我々には許るされない。若し我々の陣營に其の様な二元論的の批評態度を採る者が在らざれば(私は無いと信ずる)其れは大なる誤謬である。マルクス主義者の採る可き態度はあく二元論的でなければならぬ。これは自明の事であるが、時々、忘れて誤謬を犯す批評家がある。  
——  
もあれ、我々が藝術作品に加ふる批評は以上述べた様な態度をもつて成される時、始めて正しい批評が下されるのである。  
これを我々は前提として、今後上毛文壇の作品を批評するであらう。(八月廿三日)

れを争ふべからず。  
プロレタリア運動にたゞさる者は、階級的立場を守り團體の統制に服すべきものなれども、中には裏切りや脱線をなすものもある事も豫め覺悟し置くべし。極端なる潔癖を望まば手も足も出せず。  
——何事も法則に従ひ一定の段階を経るものなれば、徒に焦るべからず。一生を通じての使命と心得、倦まず撓まず戦ふべし。理論も、階級意識も、人生觀もが渾然と一致したる時はじめて鐵の如き闘士たり得べし。  
——一九二九・七・一九——



戯曲 夜

一九二九年の冬

榛名杏二郎

第三夜  
所—座敷の内部。右は土間つきあたり戸。中央より左は階段。其中央に爐。左は隣の部屋の障子。土間には農具、籠、除雪用具等。  
人—老母  
老父  
地主 松井  
百姓 徳さん  
姉娘 お糸  
其子供 正坊  
監督 除雪人夫頭  
百姓大勢

老父—老母に於て坐つて居る。  
老母—今夜も行くのかい。外はひさい吹雪だよ。止めにしてたうさかね。  
老父—大丈夫だ。もうそろそろ徳さんが誘ひに来る頃だが。  
はなし。それより早く行つておやり。  
(老母左の部屋に入る。老父打沈んで居る。戸をがたびしやさせる者がある。)  
老父—徳さんかい。今行くよ。  
(以下六百字削除)  
(外で騒い人々の聲近づく。戸開いて戸板にのせられた老人の體死體を持つた百姓の除雪人夫監督と共に入り来る。正坊呆氣にさらされる。老母も呆然として見つめる。)  
老母—まあ〜〜泣く)  
正坊—かあちゃん! 母ちゃん!  
監督—吹雪があまりひどいので汽車の來るのが分らなかつたので飛んだ事になりました。お氣の毒です。  
百姓—お氣の毒で済むこいかい之は〜泣く)  
(姉—の部屋より走り出して母の傍に行き共に父に向つて泣く)  
姉娘—おまつあん!  
正坊—母ちゃん泣く)  
(奥で姉娘の泣く聲。)  
百姓—俺も見やあ居られねえ泣き出す)  
(静かなる中に吹雪の増々強くなる音……)幕。

老母—今はほんごにお前さん一人が力なんだから身體に氣をつけてお呉れよ。  
老父—うん。信太郎が學校を卒業して歸つてくりやつつと樂になるからなあ。それを樂しみにそれ迄の辛抱と思つて出来るだま働くよ。  
老母—全く信太郎一人が頼みだよ。お由は正吉の所へ早くかたづけて良かつたね。今時は百姓より職工の方が暮しは樂だらうと思ふよ。  
(左の障子内にて咳の聲)  
老父—それはさうさお糸の工合はさうなんだ。大分咳をしてゐる。お前行つて見ておいて。  
老母—ほんごに咳をしてゐる。あの子はかくしてゐるが餘程悪いらしいよ。お金でもあればおつ養生もさせられるんだ。今思ふに何故女工になんか出したのだからさう残念でしやうがないよ。少し許りの給金に眼が眩んだのが悪かつたのだ。あんな病氣になつて來るなんて。  
老父—よせよ。今更泣言を言つたつて元通りになる譯で

第四夜  
所—病院の二階の一室。左に死せる青年の横たはれるベツ  
D。中央に窓カカーテン。右隅にテーブルと椅子と花。Dは右手前。  
人—青年の弟 佐藤 襄二  
友人 林 信太郎  
親父 友人の下宿の  
女(青年の戀人)島崎 秋子  
職工B (聲だけ)  
(電燈は消してある。窓のカカーテンの隙間から月光がもれてゐる。弟が友人を連れてDから這入つて來る。友人死者の所に行き黙禮、それから……)  
弟—よく來て呉れたね。  
友人—さうさういふなかつたのですね。僕、仕事を早く切り上げて來れば良かつたのだ。生きてお居るの中に會へなくて残念な事をしました。  
弟—疲れてゐるので別室で休んでゐます。  
友人—兄さんはさうしてそんなに身體を痛めたのですか?  
弟—鑛山で無理を仕過ぎたのでせう。歸つて來た時には大變悪かつたのです。今死にたくないもつと先が見届けたいと言つてゐましたが。  
友人—兄さんは本當に立派な思想を持つてゐらつしやつた僕はあの方の考へた事は正しい事であると思つてゐますよ。  
弟—僕も此頃になつてその事が増々はつきり分つて來まし

た。兄は最後まで僕に希望して呉れました。僕は兄の爲にも之から闘ふつもりです。友人一は兄さんの前で約束させよう。二人共正義の爲に闘ふ。

弟一ええ。(二人握手して暫らく無言)

友人一學校では本當の學問は出来ませんね。僕はつくづくさう思ひますよ。學園に眞の科學無し。僕は今迄内職なまじして學資の足しにする必要は無かつたのです。でも國で親達僕が一人に將來の希望をかけて働いてゐるのを考へるにさうしてよいか分らなくなりました。でも眞理の爲に闘ふ僕達はずいぶん強くなればいけませんね。弟一さうです。今迄闘ひました。(ドアを叩く音)

弟一はい。(友人の下宿の親父息せき切つてゐる)

親父一林さん一居ますか?

友人一おぢさんか。さうしたの? 親父一電報ですよ。心配なので持つて来ました。早く読んで御覽なさい。

友人一さうも有難う。(受取つて弟のつけた卓上電燈で讀む)

あつ。(無言のまゝ、弟に見せる)

弟一「チチニス スグカヘ」

女 武夫さん。お話をしませう。

い、お月様よ。あの晩も美しいお月様だつたわね。御返事ならぬの。貴方は死んでしまつたのね。

武夫さん。私が出す決心をしたのよ。ほんのさつき迄は、私貴方と手を組んで元氣よく新しい道を歩いて行く姿を夢みてゐたわ。

理想に向つてまっしぐらに。それはそんなに愉快なことせう。

でももう駄目なんだわ。駄目なんだわ。何故貴方は死んだの。

そんな事聞くのはいけませんね。貴方は最後まで勇敢に闘つたのね。

さうよ。貴方は永遠に私の英雄よ。眞理の使徒! さうだわ。

私も戦はばいけませんわね。おえ、やるわ。やりますよ。

貴方の復讐よ。誓ひますわ。お月様! 貴方が證人よ。

(女) さうして闘ふ。

もう行きますわ。戦の門出よ。もつとお話したいのね。

規律ある行動! それを私達のモットウよ。これがほんこの、ほんこの最後のお別れよ。

親父一ではあの林さんのお父さんが。友人一未だ終列車には間に合ふだらう。君、僕歸ります。

弟一(ボケッとして) 蓋を取り出し友人に渡す。ほんの少しだが何に要するか分らないから持つて行つて呉れ給へ。

友人一(其手をしっかりと握りしめて) すまない。弟一汽車に遅れないやうに。それから道中氣をつけてね。

友人一有難う。左様なら。死者にも禮をして下宿の親父共へ去る。

弟一あ、氣の毒な方だ。(電燈を消し椅子にかけける)

弟一兄さん! 闘ひは増々烈しくなつて行きます。僕もやりますよ。兄さんの分まで。

(間)

弟一(ドアを静かに開いて女のぞきこむ。弟氣がついて) 弟一さなですか?

女一(裏二さん) (這入つてドアを占める) 私よ。弟一(立上る) 秋子さん。(近よる) 遅かつた。

弟一(弟ベッドを指さす。女走りより泣き伏す。弟靜かにドアから去る。間)

(女立上つて窓に行きカーテンを引く。月光室内に流れ込む。椅子をベッドの枕邊に運んで腰かける)

### 第五夜

所一相隣れる家の二階の部屋二つ。右は同志の集合所、左は信太郎の下宿してゐた煙草屋。梯子段は何れも部屋の奥にある兩方の家の窓向き合ふその間に屋根がづつと奥まで續く。

人一職工 A 長井 松藏  
職工 B 島崎 秋子  
女 煙草屋の  
親父 煙草屋の  
労働者 A  
労働者 B

息子 (兵士) 啓二郎  
老父 劇場の雇人  
乞食の子 チビ公  
青年 佐藤 廉二  
學生 林 信太郎

(左の二階は暗い。右の家の二階では職工 A B 三秋子がピラ、ボスター等を書きながら話してゐる)

職工 A 機械に食はれて死んだ正吉の仇が討てると思ふ。嬉しくて堪らねえ。お互に長い間苦勞したなあ。

職工 B 一うん。俺もさうさう嫌なことをしたよ。病院で辛に親切な人を石で探りあつて、醫者にや来て貰つたがやつぱり駄目だつた。

女一長井さん。石で探りあつたつて何? 職工 B 一其何だ。最初の頃は頼んでもこつちの足元を見て醫者の奴来て呉れないもんだから頼にさつて病院の窓に石をぶつてやつたのさ。

女一まあ危い。病人でも居たらさうするの。職工 B 一そんな事考へる暇は無かつたよ。そしたら其ぶつこはれた窓から顔を出したのがあの佐藤さんの弟さんだつたやねえか。それから色々面倒を見て貰つた。それ俺が石を投じたんだ病院にや佐藤さんが死んで居られたんだ。あの人も親切な良い人だつたがなあ。もつと生きてゐて貰ひたかつたよ。

(秋子うつむいて知られない様に涙をふく)

(一同暫く黙つたま、仕事を續ける。其間に左の家の二階に煙草屋の親父上がつて来て電燈を點ける)

親父一もう今日で丁度一週間になる。さうなされたことだらう。さうし片附けておかか。(さうさう何か片づけ始める)

職工 A 一此際りの學生さんはさうしたのだ。近頃姿を見せないが。職工 B 一國で不幸があつたさうか。歸つたのださうだよ。俺の嫌の死んだのと同じに。

(労働者二人右の家の梯子段から上つて来る)

労働者 A 一今歸つた。(坐つて汗をふく)

労働者 B 一(立つたま、で) 喜んで呉れ。もうこつちのものだ。後は川向ふの仲間が立つのを待つばかりだ。喪二さんは未だ歸らないかい。

職工 A 一うん。間違ひなく戻つて来るだらうと思ふんだが。遅いから心配だな。

労働者 B 一ちや俺達が見に行つて来やう。さうだ出来てくるのだけれども貰つて行くかな。

職工 A 一こつちにもあるよ。(差出す)

労働者 B 一秋子さんも精が出ますね。(ピラ、ボスターを集めて手に持つ)

労働者 A 一さあ行かう。

労働者 B 一よし来た。糊は下だつたね。

女一さうですわ。未だ残つてると思ひます。

(労働者二人降りて行く)

職工 A 一状況はい、らしいぞ。元氣を出してもう一仕事やらう。

(三人再び始める)

女一まあ危い。病人でも居たらさうするの。職工 B 一そんな事考へる暇は無かつたよ。そしたら其ぶつこはれた窓から顔を出したのがあの佐藤さんの弟さんだつたやねえか。それから色々面倒を見て貰つた。それ俺が石を投じたんだ病院にや佐藤さんが死んで居られたんだ。あの人も親切な良い人だつたがなあ。もつと生きてゐて貰ひたかつたよ。

(秋子うつむいて知られない様に涙をふく)

(一同暫く黙つたま、仕事を續ける。其間に左の家の二階に煙草屋の親父上がつて来て電燈を點ける)

親父一もう今日で丁度一週間になる。さうなされたことだらう。さうし片附けておかか。(さうさう何か片づけ始める)

職工 A 一此際りの學生さんはさうしたのだ。近頃姿を見せないが。職工 B 一國で不幸があつたさうか。歸つたのださうだよ。俺の嫌の死んだのと同じに。

(労働者二人右の家の梯子段から上つて来る)

労働者 A 一今歸つた。(坐つて汗をふく)

労働者 B 一(立つたま、で) 喜んで呉れ。もうこつちのものだ。後は川向ふの仲間が立つのを待つばかりだ。喪二さんは未だ歸らないかい。

職工 A 一うん。間違ひなく戻つて来るだらうと思ふんだが。遅いから心配だな。

労働者 B 一ちや俺達が見に行つて来やう。さうだ出来てくるのだけれども貰つて行くかな。

職工 A 一こつちにもあるよ。(差出す)

労働者 B 一秋子さんも精が出ますね。(ピラ、ボスターを集めて手に持つ)

労働者 A 一さあ行かう。

労働者 B 一よし来た。糊は下だつたね。

女一さうですわ。未だ残つてると思ひます。

(労働者二人降りて行く)

職工 A 一状況はい、らしいぞ。元氣を出してもう一仕事やらう。

(三人再び始める)

女一まあ危い。病人でも居たらさうするの。職工 B 一そんな事考へる暇は無かつたよ。そしたら其ぶつこはれた窓から顔を出したのがあの佐藤さんの弟さんだつたやねえか。それから色々面倒を見て貰つた。それ俺が石を投じたんだ病院にや佐藤さんが死んで居られたんだ。あの人も親切な良い人だつたがなあ。もつと生きてゐて貰ひたかつたよ。

(秋子うつむいて知られない様に涙をふく)

(一同暫く黙つたま、仕事を續ける。其間に左の家の二階に煙草屋の親父上がつて来て電燈を點ける)

親父一もう今日で丁度一週間になる。さうなされたことだらう。さうし片附けておかか。(さうさう何か片づけ始める)

職工 A 一此際りの學生さんはさうしたのだ。近頃姿を見せないが。職工 B 一國で不幸があつたさうか。歸つたのださうだよ。俺の嫌の死んだのと同じに。

(労働者二人右の家の梯子段から上つて来る)

労働者 A 一今歸つた。(坐つて汗をふく)

労働者 B 一(立つたま、で) 喜んで呉れ。もうこつちのものだ。後は川向ふの仲間が立つのを待つばかりだ。喪二さんは未だ歸らないかい。

職工 A 一うん。間違ひなく戻つて来るだらうと思ふんだが。遅いから心配だな。

息子「私達はがまん仕過ぎたのです。此上する必要はありません。私には自分達の力が分つて来たのです。強くなりませう。ねお父さん。」  
(父の膝に飛びつく)

親父「啓二郎分つたよ。」

(二人共感動して暫くじつとしてゐる)

(右の家の二階へ老人「乞食の子が焼芋をかへて登つて来る。)

老人「今晚は皆さん。寒い夜にはお腹が空いては毒だと思つて焼芋を仕入れて来ました。少しですが召上つて下さい。私には何もお手傳出来ませんので。」

職工A「すまねえなぢいさん。お前さんも仕事は休みだらう老人へえ。一昨日から小屋はしまりました。」

職工B「遠慮なくおぐよ。秋子さんも如何。女一有難う。おぢいさん御馳走になります。」

老人「さうぞ。乞食の子にお前もお上り。」

(一同食ふ。遠方で喚聲上り次第に大きくなつて行く左の家では静かに話し始める)

息子「こゝに居た學生さんは？」

親父「親御さんがじくなつたので一週間ばかり前に國に歸られたよ。」

息子「物のよく分つた人でしたな。」

(右を指さして)お隣りは？

達の集まる所だぞ。裏町のそばの横の二階だ。乞食の子に知つてよ。幾度も行つた事があるんだから。職工A「書上げて労働者Bに渡すでい、か。労働者B「受取つて読むよし。(乞食の子に渡す)なくすなよ。頼むぞ。乞食の子(しつかり懐中におさめて)死んでも離さねえや。おぢいさん。行つてくるぞ(急いで梯子を降りて行く)

老人「氣をつけて行つて呉れ。」  
(又喚聲が高くなる。一同興奮する。左の家の階下で呼ぶ聲)

(信太郎泥によこされて上つてくる)

息子「學生さんだ。」

親父「林さんちやありませんか。國の方はもうよいのですか。」

學生「ええ。よいにも悪いにも大騒ぎです。友達に會ひたくなつて歸つて来ました。」

(息子に)貴方は？

息子「私達は人民の味方になつたのです。」

學生「しまった。君達が一番心配だつたのです。」

おぢいさん。みんなは留守かしら。

親父「さうですか。(窓をあける、一同よる)

親父「元氣の良い人達だよ。何だか毎日相談したり、紙つべらを書いたりしてゐる。息子「さうですか。おや遠くて聲がしますね。」  
(右の家の二階へ労働者B上つて来る)

労働者A「大變だ。裏二さんが怪我をしただ。」

(一同驚く。梯子からBに助けられて裏二青年表はれる。頭、顔血にまみれてゐる。)

職工A「早く手當を。」

(秋子手拭でふいたり縛つたりして手當する)

青年「もう大丈夫です。」

職工B「様子はどうでした？」

労働者B「上首尾だ。ほら聞えらだらう。もう始めてゐるぞ。だが山の手の仲間が報せなくちや。報せなくとも騒ぎが大きくなれば分ると思ふが何か言つてやりたい。網が張られてゐるので下手をする。佐藤さんの二の舞をするから困つたものだ。」

乞食の子「おぢいさん。俺をやつて呉れ。」

労働者B「手前行つて呉れるか。大丈夫かな。」

乞食の子「大丈夫だ。俺は小さな小さな技路でも知つてゐるんだ。」

労働者B「ちや行つて呉れ。おい誰か手紙を書いて呉れ。」

下町の準備よし、もう始めたかな。(職工A急いで書き始める)乞食の子「先を知つてゐるか。山の手のおぢいさん

學生「おーい。隣り！誰か居ませんか。労働者A「誰だ。(窓を開ける)お、隣りの同志か。(裏二青年も皆一所に窓に行く)青年「林君か。君さうしたのだ。」

學生「あ、讓二さんも居るんだね。國では百姓達が團結して始めたぞ。僕は町の様子が知りたくて戻つてきたのだ。」

(左の家の親も興奮した顔に並べる)

労働者B「農民も超つたか。万才だ。」

息子「喜んで下さい私達もです。」

労働者B「お、X隊もだ。嬉しいなあ。」

(此時兩方の家の間の屋根の向ふの空一帶がX.X.M.となり民衆の進む大きなまきみの聲上る。一同窓から屋根に出た立並んで見る)

労働者B「見ろ！偉大なる夜だ！黎明は近いのだ。」

労働者A「光へ！光へ！ 萬歳！ 一同萬歳！！

(嵐の如き喚聲の中に……………)

(一九二八・二・七)



### 詩

#### 硝子玉の眼

瀟 彌 動

俺の眼が  
ドカッ、ミ強壓にた、きのめされて  
血液と一緒にサツミ飛散つた時  
俺は、俺の眼を完全になくしてしまつたのだ  
それは濟南城外の十町までは隔てない  
X街の角であつた  
Xの影で小銃を握る俺  
トタリ／＼ぶつ倒される  
支那の、日本の兄弟達  
俺の弾丸は其ネライをはづれはしない  
だが!!俺の眼は完全になくなくなつたのだ  
X  
X  
X

俺いら達の村ちや、俺の眼が一ツになつちやつたんで村長や村會議員やがよるこび  
御國の爲めに名譽の負傷を吐しやがる  
義  
親父は、  
昨夜煎餅布團の中で泣きじやくつた  
俺はもう  
満足な奴は貰ひぬへ  
畜生!!  
俺を満足にして遣しやがれ  
俺あ、  
不具の仲は生んだ覺はねへ  
X  
X  
X  
硝子玉の眼のくり玉  
朝ミ夕ミにえぐり出しては掃除する  
畜生!!  
見えねへ眼のくり玉  
そんなもの俺あ  
俺あいらねんだい  
X  
X  
X  
だがこの四肢ミ肋骨ミ頭蓋ミバラ／＼に解體しやつた様な人間が

この世界にや、こんなに居る事か俺や、その兄弟達を、こんなにしちやつた豚共が果して何處にさうして、そんなシャツ面をしてるかを俺はチャント呑み込んでゐるんだ。  
終末に 完

#### 九月二題

磯田沙路

A  
戰つてみませう  
戰つてみませう  
今日も。  
營壘不良に腹せた細い體軀ではあるけれど、勝てないことはなしてやせう。  
この意氣で、

このころで。  
生活苦に死んだに云はれたくない私は  
コミニストなのかも知れませんか。  
B  
夜になれば、ロシヤサラサのカーテンの前に立つ、白粉の女です。  
無智な彼女は、濃艶な顔笑みの中に、彼女の肉を賣ろうとまわしてゐます。  
だが放浪の兒には、いゝお友達なので

した  
指先は倦怠の眞をくくり  
本の肉體は僕の暖房へすべり込んだ  
彼は意識的に歌をうたつた  
偷盜のやうな風は扁桃腺の膨脹をにしきして吹いて行く  
犬は忠實であるなにもでもない  
銀メッキの鎖に女郎のやうに束縛される  
ルンペンの下駄に鼻をつけた  
犬は牽の花の色を頭に残して歩いてる  
けれど彼はほりの顔に機械的の笑ひを浮べてる

#### 廻轉と旋轉と轉轉と

沖 黄

彼は犬を愛し鎖を断ち切り菜の花の野へ放した  
犬は解放された歡喜の聲をあけた  
彼は葡萄酒の柵の下で懐からパンフレットを出して讀んだ  
鶏小屋の金網がチカチカミ光源に輝く  
眸は強い薬品のやうな刺激を受けた  
彼は哲學を勉強した。それは麻雀の空想的遊技であつた

ハルトマンの顔を圖書館の手ずれのした一冊に発見した日――  
その日だ彼は哲學に永遠の訣別をあたへた  
國本の哲學辭典は街道にガス燈の光りにさらされた  
彼はロマンチックの詩を書いた  
朝霧が流れ！胃頭に必ずこ書いた  
あまりに非詩人的な本性を知る。彼は女學生間に流行のSの顔に唾をかけた  
それは大きな歴史的展開であり彼二ヶ月前の死刑執行と同様であつた  
彼は斯くして自己に二度まで死刑をあてた  
最初にして最後のルンペンに誕生した  
彼は慌てなくなつた  
彼は妊娠した女のやうな男であつた  
砂地の風が光線を混濁して吹き糞糞が  
豚は飽満な歩行を繰返へした  
パンフレットの活字は彼の瞳みに反逆

#### 入營する弟よ

相場 誠哉

じゃ弟よ、俺等の合言葉に似てしつかり行つて来いよ  
過ぐる底冷えの深秋、千乾らびた蕪の